

現代世界演劇 13 (全17巻別巻1)
リアリズム劇(2)

定価 二二〇〇円

一九七一年二月二〇日印刷
一九七一年二月二〇日発行

訳者

◎

鳴海 四郎
倉橋 健郎
丸山 匠

発行者

寺村 五一

印刷者

田中 昭三

発行所

株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(〇七)七八一一(代)

振替東京三三二二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 51630 (出) 6911

現代世界演劇

13

リアリズム劇(2)

白水社

T・ワイルダー……わが町 *OUR TOWN*
Thornton Wilder……

鳴海四郎

Tennessee Williams……A STREETCAR NAMED DESIRE
T・ウィリアムズ……欲望という名の電車 *田中隆雄*

H・サックラー……大いなる白人の希望 *THE GREAT WHITE HOPE*
Howard Sackler……倉橋 俊

J・ツィーム……田舎だより *PROVINZ AUS DER*
丸山 隆

解説 鳴海四郎



現代世界演劇

13

リアリズム劇
(2)

目次

T・ワイルダー作 鳴海四郎訳 わが町	7
T・ウィリアムズ作 鳴海四郎訳 欲望という名の電車	71
H・サックラー作 倉橋 健訳 大いなる白人の希望	175
J・ツィーム作 丸山 匠訳 田舎だより	301
解題	353
解説 鳴海四郎	359

装幀
朝倉
攝

わ
が
町
三幕

ソ
ー
ン
ト
ン
・
ワ
イ
ル
ダ
ー
作
鳴
海
四
郎
訳

Thornton Wilder

OUR TOWN

© 1938, 1957 by Thornton Wilder, Japanese
translation rights arranged by Brandt & Brandt,
New York, through Charles E. Tuttle Co., Inc.,
Tokyo

登場人物（登場順）

進行係

ギブズ医師

ジョー・クローエル

ハウイ・ニューサム

ギブズ夫人

ウエブ夫人

ジョージ・ギブズ

リベッカ・ギブズ

ウォリー・ウエブ

エミリー・ウエブ

ウィラード教授

ウエブ氏

二階席の女

客席の男

ボックス席の婦人

サイモン・スチムソン

ソームズ夫人

ワレン巡査

サイ・クローエル

野球選手三人

サム・クレীগ

ジョー・ストダード

この劇の場面はすべてニューハンプシア州のグローヴァーズ・コーナースの町。

第一幕

幕なし。

装置なし。

入場する観客には、薄明かりの空虚な舞台が目にはいる。

間もなく進行係が、帽子をかぶりパイプをくわえて現われ、テーブル一個と椅子三脚とを左手舞台前面に、同じくテーブル一個と椅子三脚とを右手舞台前面に並べはじめる。さらに低いベンチを一個、左手のウェブ家の角にあたるところに置く。

《左》《右》というのは演技者が客席に向かっての左右であり、《奥》というのは舞台の後壁に近い方向である。

客席の照明が暗くなりかけるころ、進行係は舞台の配置を終えて、右手の舞台額縁ブレイク・ニームの柱に寄りかかり、遅れて入場してくる観客を見守っている。

客席が完全に溶暗すると、彼は語りだす。

進行係 この劇は、題名は《わが町》、作者はゾーントン・ワイルダー。製作と演出はA（あるいは、製作はA、演出はB）、出演するのはC嬢、D嬢、E嬢、F氏、G氏、H氏、その他大勢です。町の名前はニューハンプシア州のグローヴァーズ・コーナーズ——マサチューセッツ州から境界線をちょっと越えたあたりでして、正確にいうと、北緯四十二度四十分、西経七十度三十七分というわけですな。さて、第一幕はそのわが町の、ある一日です。日付は千九百一年五月七日。時は日の出の少し前。

（雄鶏おんどりが時をつくる）

あっちの山のかげ、東の空に少しずつ光の筋が見えてきた。

あけの明星ってやつは、消える前にはすごく光り輝くもんですな——じゃないですか？

（しばらく星をながめてから、舞台奥へ行く）

さあ、ここらで、この町の配置をお知らせしておきましようね。ここが——

(とはつまり、舞台後壁と並行して)

わが町の本通り。ずうっと向こうに鉄道の停車場。線路はあっちへ走ってます。ポーランド人の町が線路の向こう側にある。それからカナダ人の部落もね。

(左手の方角)

向こうに組合教会、通りを隔てて長老派教会。

メソジストとユニテリアンはあっち。

バプテスト教会は川沿いの窪地くぼちのところ、カトリック教会は鉄道線路の向こうだった。

ええと、ここが町役場兼郵便局、地下室が留置場です。いつだっけか、ほら、例の大統領に立候補したブライアンね、この階段に立って大演説をぶったことがあるんですよ。

それからこのへんが商店街。どの店の前にも、馬をつなぐ柱と馬に乗る踏み台が並んでる。なんしろ、この町に自動車が出るのはあと五年もしてからで——その自動車の第一号は銀行家のカートライトさんの車だった、町いちばんの大金持ち……そら、あそこの丘の上の大きな白い家ね、あれが住まいですよ。

ここが食料品店、ここがモーガンさんのドラッグストア。この町の連中はね、たいてい日に一度は、この二軒の店に顔を出すようになってるんです。

小学校はあっちです、ハイスクールはそのまた先。朝の九時十五分前と、昼飯どきと、午後の三時、この三回は、校庭できやーきやー騒ぐ子供たちのわめき声が町じゅうに響き渡るってわけ。

(舞台右手前のテーブルと椅子に近づく)

ところで、ここがわが町のお医者、ギブズ先生のうちです。ここが勝手口。

(蔓草つるくさと花で覆おほわれた格子垣のアーチが、舞台額縁の左右からひとつずつ押し出される)

ええ、舞台装置がほしいという考えのお客さんのために、装置を出しましたよ。

ここがギブズさんの奥さんの裏庭で、玉蜀黍とうもろこしに……グリーンピース……いんげん……立葵たきぎ……ヘリオトロップ……それから、ところ狭しと薊あざみの花。

(舞台を横切る)

このころは、町の新聞は週に二回しか出ないんです——グロウヴァーズ・コーナーズ・ニュースってやつ——で、ここが編集長のウェブさんの住まい。

ここがウェブ夫人の裏庭。

だいたいギブズさんとこと似たりよったりだが、ここは向日葵ひまわりがどっさりだ。

(舞台中央で上を見る)

ここにね……でっかい胡桃の木がある。

(右手の舞台額縁の柱の位置に戻り、しばらく観客をながめる)

いい町ですね、なかなか。

べつにこの町から有名人が出たってことはないようですね。

あの丘の上の墓地へ行くと、いちばん古い墓石は、千六百七、八十年でとこで——グロヴァー家、カートライト家、ギブズ家とかハーシー家とか——いま暮らしてる人たちとおんなじ名前ですよ。

さて、いまは、さっき言ったように、日の出前。

この時間、町で明かりがついてるのは、まず線路わきのポーランド人の小屋、いまかみさんが双子を産んだところ。それから、ジョー・クロウエルの家、ここじゃ息子が新聞配達に出かけるんで、いま起きたところ。それから停車場、ちびのホーキンスが五時四十五分のボストン行きに旗をふろうと待機中です。

(汽車の汽笛。進行係は時計を取り出して、うなずく)

もちろん、田舎へ行けば——どこだって乳しぼりやなんかで、かなり前から明かりはついてるはずなんだが、町の連中はどうも朝寝坊でしてね。

ともかくこうして——また新しい一日がはじまった。ギブズ先生がいま本通りをやってくる。お産をさせにいった帰ります。奥さんが朝ご飯の支度をしに下へおりました。

(ギブズ夫人は三十代のなかごろの小太りした明るい感じの女、いま右手の《階段》をおりてくる。台所で、観客の目に見えない《想像上の》窓のシェードを引き上げて、竈に火をおこしはじめる)

ギブズ先生が亡くなったのは千九百三十年でして、いまの新しい病院には先生の名前がついてますよ。

奥さんのほうが先でした。だいふ以前のことですがね。リベッカっていう娘さんの嫁ぎ先がオハイオ州のカントンの保険屋さんで、そこへ訪ねていってるときに死んだんですよ——肺炎で——でも、遺骸はここへ戻ってきました。あそこの墓地に眠ってる——ギブズ家やハーシー家の家族といっしょにね——あの人、その組合教会でギブズ先生と式をあげる前は、ジュリア・ハーシーっていったんです。

この町じゃね、みんな好きなんですよ、だれがどこでどうしたって話が。

そらそら、ウェブさんの奥さんも朝の支度におりてきた。

——あれがお医者さんのギブズ先生。けさは夜中の一時半に呼び出しを受けたもんだ。

それから、あれがジョー・クローエル、ウェブさんの作った新聞を配ってる所。

ギブズ医師が左手から本通りを歩いてくる。自宅へ向かつての曲がり角で立ち止まり、《想像上の》黒カバンを下におろし、帽子をとり、ひどく大きなハンカチで、疲れきった顔をふく。

ウェブ夫人は瘦せてきまじめで機敏なタイプ、エブロンをゆわえながら、左手から台所にはいつてくる。竈に薪を入れ、火をつけ、朝食の支度をする動作を行なう。

だしぬけに、ジョー・クローエル、十一歳が、右手から本通りを駆けてきて、想像上の新聞を家々の戸口に投げこむ。

ジョー・クローエル 先生、おはよう。

ギブズ医師 おはよう、ジョー。

ジョー・クローエル だれか病気だったんですか？

ギブズ医師 いや、ポーランド人町で双子が生まれたんだ。

ジョー・クローエル 新聞、いま持ってく、先生？

ギブズ医師 ああ、もらっていこう——水曜日からこっち、なにか重大事件があったかな？

ジョー・クローエル 大ありさ。ぼくの担任のフォスター先生が、コンコードの町の人んとこへお嫁にいくんだって。

ギブズ医師 へえ、そうかい——それできみたちどう思ってるの？

ジョー・クローエル そりゃ、ぼくには関係ないけどさ——先生になるつもりでやりだしたんなら、ずっと先生をしていなくっちゃ。

ギブズ医師 膝の調子はどうだね、ジョー？

ジョー・クローエル いいですよ、ふだんは全然平気。だけれど、先生が言ったみたいにね、雨の降る前はちゃんと合図があるんです。

ギブズ医師 きょうの合図はどうだい？ 降りそうかね？

ジョー・クローエル いいえ。

ギブズ医師 ほんと？

ジョー・クローエル ほんと。

ギブズ医師 膝のほうがちがうことはないの？

ジョー・クローエル 全然。

ジョーは立ち去る。ギブズ医師は立ったままで新聞を読む。

進行係 いまの少年、ジョー・クローエルのことでしょうかと話をしときましよう。すぐく頭のいい子でね——この町のハイスクールを首席で卒業、マサチューセッツ工大の奨学金をもらって、そっちも首席で卒業。当時はボストンの新聞にも詳しく書きたてられたもんだ。将来きつと偉い技術屋になるってね。ところがあの戦争だ、フランスで戦死ですよ——あれだけの教育もみんなふいすからねえ。

ハウイ・ニューサム（左手の舞台外で） そら行け、ベシー！ どうしたんだ、きょうは？

進行係 ああ、ハウイ・ニューサムだ、牛乳配達なの。

ハウイ・ニューサム、三十歳ぐらい、胸までの作業ズボンをはいて、本通りを左手から登場、目に見えない荷馬車に寄り添って、想像上の牛乳瓶入れを手に歩いてくる。瓶の触れあうカチンカチンという音が聞こえる。ウェブ家の格子垣のところに数本を置き、それからギブズ家のほうへ舞台を横切るが、舞台中央で立ち止まってギブズ医師に声をかける。

ハウイ・ニューサム 先生、おはよう。

ギブズ医師 おはよう、ハウイ。

ハウイ・ニューサム だれか病人が？

ギブズ医師 双子のお産だよ、ゴラスラフスキのかみさんが。

ハウイ・ニューサム へえ、双子ですか？ この町も年々ふくれあがっていきますな。

ギブズ医師 降るかね、きょうは？

ハウイ・ニューサム いやいや。天気は上々——一日じゅう照りつけますぜ。来な、ベシー。

ギブズ医師 ようベシー。（舞台中央奥に立ち止まっている馬をなでる）この馬、いくつになる？

ハウイ・ニューサム おっつけ十七でさ。こいつ、近ごろは道順がこんがらがってね、ロックハートさんちで牛乳やめちまってからでも、やっぱり配達していくってきかねえんだ——道々のべつぶつくさこぼしてやがる。

ギブズ家の勝手口に行く。ギブズ夫人が待っている。

ギブズ夫人 おはよう、ハウイ。

ハウイ・ニューサム おはよう、奥さん。先生、いまそこまで来てますよ。

ギブズ夫人 そう？ あんた、きょうはおそいみたいね。ハウイ・ニューサム へえ。分離器が故障しちゃってね。

どうしたとか。(舞台中央奥でギブズ医師とすれちがう) あ、先生！

ギブズ医師 よう！

ギブズ夫人 (二階へ呼びかける) さあ、みんな！ 起くる時間ですよ。

ハウイ・ニューサム そらベシー、行くんだ！ (右手へ退場)

ギブズ夫人 ジョージ！ リベッカ！

ギブズ医師は勝手口へたどり着き、格子垣をくぐって家のなかへはいる。

ギブズ夫人 どう、無事にすんで？

ギブズ医師 ああ。まったくの話——猫のお産みたいさ。

ギブズ夫人 ベーコンすぐできますから、そこに掛けてコーヒー飲んでいてね。これから二、三時間は眠れるんでしょう？

ギブズ医師 ふん！……十一時にヤウエントワースのかみ

さんが来るしな。まあ察しはついてるがね。胃の調子がおかしいんだ。

ギブズ夫人 全部合わせたって三時間そこそこのよ、あなたの睡眠時間は。まったく、これじゃ先へ行ってどうなることやら。いっぺん休みをとって、どこかへ抜け出してくださるといいんですけどね。どれだけ体のためになるか。

ウェブ夫人 エミリーイッ！ 起くる時間よ！ ウォリー！七時ですよ！

ギブズ夫人 あなたね、ジョージに言ってやってくれないかしら。近ごろ、あの子どうかしちゃったらしいのよ。全然役にたたないの。薪割りだって手伝ってくれないし。

ギブズ医師 (流して手を洗ってふいている。ギブズ夫人は竈で料理に忙しい) 口答えをするのか？

ギブズ夫人 いいえ。鼻を鳴らすのよ！ 頭のなかはもう野球のことばかり——ジョージ！ リベッカ！ 学校に遅れますよ。

ギブズ医師 ふーん……

ギブズ夫人 ジョージったら！

ギブズ医師 ジョージ、早くしろ！

ジョージの声 はあい、パパ。